親子で読んで聴く　クラッシックギターの童話

おはなし２　　コグマ 「フリア・フロリダ」(花のような女の子)

　今日はフーちゃんのピアノの発表会の日です。
　ピアノは一週間に一度、幼稚園のときから、先生のおうちで習っています。
「発表会に出てみる？」と先生に誘われたので、思い切ってチャレンジします。
　お父さんとお母さんはお仕事をかたづけて後から来るので、フーちゃんは、おばあちゃんに電車で会場まで連れていってもらうことになりました。

 地下鉄を降り、途中「マミアナ坂」というところを通りました。
「おばあちゃん、マミアナって何？」
「マミってアナグマのことだよ。マミアナはアナグマの穴」
「クマの穴なの？」
「そう、小さいクマの穴だよ」
「じゃあ、コグマが住んでるの？」
「コグマね～、今は住んでいないけど、昔は住んでいたのかもねえ」

　二人は発表会の会場に着きました。すてきなホールです。
　たくさんの子どもたちがいます。みんなおしゃれをしています。
　先生もきれいな薄桃色のワンピースを着ています。
　私も、ふわっとした水色のワンピースをお母さんに買って貰いました。
　家族の人たちは、ロビーでお話ししていたり、もうホールの座席に座って待っている人もいます。
　先生の合図で、子どもたちは、控え室に移動し始めました。知っている子は一人もいません。
　おばあちゃんは、「じゃあ、がんばってね」と言うと、ホールに行ってしまいました。

　寒い季節です。
　子どもたちはカイロで手を温めたり、ヒーターに手を近づけたりして暖まっています。
　フーちゃんはお友だちもいないので、みんなの中に入れません。
　大きな控え室です。
　フーちゃんは、部屋の端っこの、赤くて分厚いカーテンのわきで、冷たい両手にふー、ふー、息を吹きかけていると…。

　カーテンの後ろからコグマが現れました。

「寒いのかあ～？」

フーちゃんはきっとマミアナからやってきたコグマにちがいないと思いながらも、じっと様子をうかがっていると、

「ふーふーしてやろうかあ～？」と、フーちゃんの手てをとりモコモコの手でなでてくれました。

　ふーふーされてもコグマの息は嫌な匂いじゃなくて、お花の石けんの匂いがしました。

　きっとコグマの住んでいる穴の中には季節のお花がいっぱいあって、もしかしたら床にもいっぱいにお花が敷きつめられているんじゃないかと思うのです。

　いい気持ちで目を閉じ、気がつくとコグマの姿はなくフーちゃんの演奏の順番です。

　フーちゃんは練習のときよりも、上手に弾けました。だって、夢を見ているようで、ぜんぜん緊張なんかしなかったんですもの。お父さんもお母さんもおばあちゃんにも、よくできたねえって頭をなでてもらえました。

　帰り、お父さんの車に乗って、コグマに手を温めてもらった話をすると、
おばあちゃんもフーちゃんと同じ歳のころ、同じようにピアノを習っていて、発表会の日、小学六年生のお姉ちゃんにお手てを温めてもらったよと話してくれました。
でも、その時は人間の姿だったそうです。そしてその場所の近くに「熊野神社」という所があったんだよ、とおばあちゃん。

「くまの神社？」とフーちゃんが聞き返すとおばあちゃんは、
「そう、そのお姉ちゃんはのんびり屋さんで、みんなから少しバカにされていたけど、やっぱり、お花の石けんの匂いがしたんだよ」と言いました。

　お父さんが、フリア・フロリダっていうすてきな曲があるよ、と言いました。
バリオスという人が作ったギターの曲なんですって。
バリオスさんが旅の途中で会った女の子に「花の様なフリアちゃん」って曲を作って贈ったんですって。
おばあちゃんのお手てをふーふーしてくれたお姉さんも、バリオスさんが会ったフリアちゃんも、きっと人間に変身したコグマだったんだと思いました。

道のわきには白い小さな水仙が咲き始めています。

フリア・フロリダ
アグスティン・バリオス(1885ー1944)
パラグアイの作曲家、ギタリスト
「花のように美しきフリア」の意味。コスタリカで出会った女性に贈った曲。

YouTube 動画（演奏：ギタリスト/パク・キュヒさん）